

紹介

ピエール・グリマル著

(沓掛良彦・土屋良二共訳)

『ローマの愛』

本書は Pierre Grimal, *L'Amour à Rome*, Hachette, Paris, 1963 (2^{ed.}, *Les Belles Lettres*, 1979) の邦訳である。著者グリマルは、フランスにおけるギリシア・ラテン文学の大家であり、わが国において最もとくに『ギリシア・ローマ神話辞典』(Dictionnaire de mythologie grecque et romaine, PUF, 1951) の編者として知られている。また、訳者の「あとがき」で述べられているように、グリマルの多くの著書はその関心が文学のみならず広くローマ文化全般に及んでいることを示しており、本書『ローマの愛』もそのような幅広い関心から生まれた研究成果の一つとして位置づけられる。本書のテーマは、タイトルからわかるとおり古代ローマにおける「愛」であるが、恋愛詩人の歌う個人的な愛にとどまらず、伝説上のローマの起源からユリウス・

クラウディウス朝の終焉に至る時代のローマ社会全体でみられた愛の様相とその変遷が、様々な角度から考察される。以下、序文および各章ごとの内容を紹介していこう。まず序文では、ローマ人の愛がギリシア世界の愛に比して一般に不評であること、つまり単なる風俗の退廃とみなされることを、安直な判断であるとして否定し、そのような判断を排除して公正な理解を試みることを、以後本書におけるローマ人の愛の再評価にあたり著者が一貫して守り続ける基本的な姿勢として提示する。

第一章「ローマ黎明期の愛」では、建国の英雄アイネイアスの時代から共和政樹立にいたる伝説を分析し、ローマ人の種族の意識下に潜む愛の観念を中心に論じる。伝説に登場する数々の愛憎の物語は、ローマ人が愛を無秩序で破壊的なものとみなし、愛欲よりも社会の秩序と義務を優先させるべきとする価値観を持っていたことを示す。

第二章「愛と聖なるもの」では、男根崇拜をはじめとし、性を司る神々に関する信仰に焦点を当て、愛のもつ宗教的価値について述べられる。ローマ人は愛に、無秩序をもたらず危険な魔力をみとめる一方で、

愛の行為と生命の神秘との深い結びつきから、容易には否定しがたい聖なる性質をも見いだしていた。この愛のもつ二面性については、ウェヌス信仰の普及が示唆するように、次第に後者の方が重視されるようになる。

第三章「ローマ人の結婚観」では、都市国家時代から共和政末期までの結婚制度・結婚観の変化と、その背景について考察される。ローマ人はもともと、結婚の本質は個人を超越した単独で新しい一人の人間としての夫婦を創造することにあると考えていた。それゆえ結婚は離婚の認められない厳格な制度であったが、次第に形骸化していく。それは「夫の監督権」のない結婚の普及により女性の法的解放が促されたことや、結婚は夫婦双方の自由意志に基づく契約であるという、もう一つの結婚観の必然的結果であった。

第四章「黄金時代の結婚と風俗」は、共和政期における結婚の実状と夫婦愛についてである。貴族家系にとって結婚は何よりもまず政治的な行為であり、従って、娘たちは結婚相手を選ぶ自由を、法律上はともかく、事実上もたなかった。また、貴族の

娘がごく早い時期に婚約するのは、ローマの古くからの慣習であった。このような状況下で、夫婦愛は情熱的な愛ではなく相互の尊敬の念に基づくべき特殊なもの、と考えられていた。ところが紀元前二世紀に、人々は結婚に愛情を求め始める。この変化は、プラウトゥスとテレンティウスの両喜劇における結婚の、描かれ方の違いの中に確認される。

第五章「自由恋愛」では、内縁関係について述べられる。男性には、娼婦・奴隸等との恋愛が許されており、一夫一婦制は事実上の一夫多妻制で緩和されていた。しかし、娼婦との関係は、若者が危険な愛欲に溺れるのを避けるため、快楽を得る程度の束の間に限られていた。ところが、時代を経るに従って、妾との内縁関係は公式の結婚に近いものへ、娼婦は快楽を得るための道具ではなく真剣に愛する対象へと変わっていく。人々が愛に十分な精神的価値を認めるようになったのである。このような変化の背後には、生活のなかの愛情を容認したギリシア的風俗の影響と、それに対するローマ社会の受入れ基盤、すなわち愛は危険なものではあるが完全には否定できない

ものであるという観念があった。

第六章「愛と詩人」では、紀元前一世紀の代表的恋愛詩人の作品を分析し、詩の中に現れる、愛を危険視する伝統的な道徳観と愛を価値あるものとして受け入れようとする自然な感情の間に生じる葛藤の様が描かれる。人々に幸せをもたらす正当なものとして愛を求めることは、『恋の作法』等、オウィディウスの作品の中で、「普遍的な」願望の理論に高められる。しかし、伝統的道徳観はなお堅持された。オウィディウスはアウグストゥスによって「背徳的」とされ、追放される。

第七章「愛と政治」は、共和政末期における有力者とその妻たちにもみられる愛情と政治的野心の対立と調和の様が描かれる。この時代、愛・金銭・野心や、女性の解放の進展によって男女関係は複雑になり、離婚と再婚が頻繁に行われる。この中にあって、カトとマルキア、トゥリアとその夫の話は、妻の独立と従順、社会的地位と愛情心の権利と理性の要請といった表面的には相いれない要素の間の幸福な均衡が実現した例と考えられる。

第八章「帝政期の愛」では、前半で共和

政末期の結婚観について述べられる。この時代に広まったストア哲学に影響されて、夫婦は双方の自由を認めたいうえで両者の共通の精神的価値観に基づいた「友愛」で結ばれる、とする結婚観が生まれる。女性が独立を強める一方で離婚を否とする伝統的価値観の残っていた当時のローマ社会では、こうした教えが受け入れられ易かったのである。一方、アントニウスとクレオパトラの「世にまねぶものなき」恋に代表される、伝統的な道徳に反した愛の生活も根強く定着していく。このような背景をふまえた上で後半では、ユリウス・クラウディウス朝の皇帝・妃たちの愛の姿が著者独自の解釈を交えて明らかにされていく。

第九章「ローマと愛」は、本書の結論部である。ローマ人は愛に対して曖昧な態度をとってきた。それは、愛は一種の狂気と警戒すべきものであると同時に生の神秘と結びついた容易には否定し難いものである、という二重の確信によって説明され得る。すなわち、ローマ人は、前者から生まれた厳格な道徳的社会的要請と、後者から生まれた魂の最も深い要求を両立させようと試み続けてきたのである。

以上が本書の内容である。本書の意義は、序文に述べられているように、単なるイメージと現代の価値観に基づいてローマ人の愛の姿を風俗の退廃とみなす一般的判断を否定し、公正な理解を試みていることにあり、著者はこの点について本書の中でしばしば指摘している。第九章の最後に、「ローマが怪物じみた愛で満ちた不浄なベビロニアにすぎなかったと考えるはならない」と述べているのは印象的である。また、神話・喜劇・歴史叙述にいたる様々な種類の文献を駆使して、宗教・結婚生活・政治活動等に現れる愛の諸相を描きだすとともに、女性の地位や結婚観といった、愛の観念に深く関わる価値観の問題についても事細かに考察することによって、ローマ社会における愛の全体像を把握しようとしており、このような視野の広さが、本書のもう一つの重要な特徴といえる。ただ、第九章にまとめられている、愛に対してローマ人が抱いた「二重の確信」を基調とした本書の趣旨が、その広い視野の中に逆に埋没してしまっている感もあり、読者の本書に対する理解を曖昧なものにしているのではないかとと思われる。また、「愛」というあまり

に抽象的な概念を扱っているために、その言葉の使われ方が些か漠然としてしまっていることも否めない。観念や価値観といった精神的側面を明らかにすることの難しさを、改めて覚えさせられる。

ともあれ、一九六三年の初版以来今日に至るまで、本書は文学のみならず歴史学において、とくに社会史の分野で注目され続けており、その価値は疑うべくもない。本訳書が、わが国において、ローマ人の精神のみならず、それによって支えられた古代ローマ社会全体に対する理解を深めるのに大きく貢献することは間違いないであろうと思われる。

(A5版 四一〇頁十六頁 一九九四年八月
白水社 二九〇〇円)
今川真紀 京都大学大学院修士課程)

編集後記

皆様いかがお過ごしでしょうか。七八巻五号をお届けします。本号はご覧の通り、若手から大家まで幅広い年齢層による、盛りだくさんの構成となりました。考古学、東洋史、西洋史、日本史、現代史と掲載論稿の領域も多岐にわたっております。学科再編の嵐のなかで、あらためて『史林』の総合誌としての役割が再認識されることを願っております。会員各位の積極的なご投稿をお待ち申しあげております。(く)

本誌には文部省科学研究費補助金研究成果公開促進費が交付されております。

<p>一九九五年八月二五日印刷 定価二二〇〇円 一九九五年九月一日発行 送料六〇円</p> <p>史林 第七八巻第五号(通巻第三九三号)</p> <p>京都市左京区吉田本町 京都大学文学部内</p> <p>史学研究会</p> <p>振替京都〇一〇七〇二一五二五五番 理事長 服部春彦 京都市南区上鳥羽藤田二丁目</p> <p>印刷所 中村印刷株式会社</p>
